

2008 年度第 14 回 FD フォーラム

「学生が身につけるべき力とは何か—個性ある学士課程教育の創造—」

日時 : 2009 年 2 月 28 日 (土) 13:00~3 月 1 日 (日) 15:00
場所 : 京都・龍谷大学深草学舎
主催 : 財団法人大学コンソーシアム京都
報告者 : 鈴木将史 (教育学部)、関篤志 (工学部)、犬塚正智 (経営学部)、
季武嘉也 (文学部)、花見常幸 (法学部)

大学教育における e ラーニングシステムの可能性

教育学部 鈴木将史

今年で 14 回目となる上記フォーラムに、今回初めて参加した。参加者が 1000 人以上という極めて大規模な催しであったが、さすがに回を重ねているだけあって、部屋が若干狭く感じたものの運営は概ねスムーズで、ストレスなく参加することができた。

【1 日目】

初日の 2 月 28 日は、全体シンポジウムが行われ、本報告の標題をテーマとする発表・討論が行われた。

山形大学学長の結城章夫氏は、地方国立大学を学部段階の教育の質で勝負できる大学にするため、学生を大切に、特に教養教育を充実させたこと、毎年「結城プラン」と名付ける具体的項目を掲げ、達成状況を検証していることなどについて述べたが、特に学長の強いリーダーシップのもと、学長主導で大学改革が行われている点が興味深かった。

金沢工業大学学長の石川憲一氏は、すでに全国的に有名な金沢工業大学のポートフォリオシステムやプロジェクトデザイン教育について述べたが、理工系大学でありながら「人間力教育」を標榜し、しかもそれを具体的な項目にしている点が、本学にも通ずると感じた。「例題解答型」から「問題発見型」へという主張には学ぶべき点が多かった。

京都大学教授の田中每実氏は、ここまでの 2 大学と違い、京都大学は都市部の総合大学という点で難しさがあることを指摘し、その上で、無秩序かつ分散型ではありながらも、能動的学習主体としての学生を育てている FD 活動について述べた。中でも、生産モデルに用いる PDCA サイクルを教育に対して持ち込むことを批判しているのが印象的であった。

どれも傾聴に値する内容であったが、「各大学の状況に応じた最適解を見つけよ」との結論には、確かにそうとしか言えないと思う反面、何か突き放されたような不満も覚えた。

【2日目】

2日目は8つの分科会（各50名）と4つのミニ・シンポ（各200名）に分かれて発表・討論が行われた。報告者は第4ミニ・シンポジウム「大学教育におけるeラーニングシステムの可能性」に参加した。

京都産業大学、佐賀大学、日本福祉大学から報告が行われたが、特に日本福祉大学の加藤幸雄副学長による発表が先進的で印象的であった。

eラーニングというと、コンピュータの中にある問題や解説を学習者が取り出して勉強するというスタイルを思い浮かべていたが、授業そのものの映像をデータとして用意し、複数の大学から利用するというスタイルについては想定していなかった。

eラーニング教材の方が周到に準備するため、内容に漏れがなく受講生に好評だとの話にはうなずける点が多く、本学でも推進を模索した方がよいと感じたが、実現までにはシステム、デザインその他、まだまだやるべきことが多く、相当の費用がかかるものと思われた。

FDというと、すでに多くの話を聞いているが、今回参加してみて、まだまだ奥が深く、全学で力を合わせて推進していかないと、なかなか先進的事例に追い付くことは大変だと感じた。

キャリア教育の実践と今後のあり方

工学部 関 篤志

(財) 大学コンソーシアム京都が主催した第 14 回 FD フォーラム「学生が身につけるべき力とは何か ―個性ある学士課程教育の創造―」に参加した。各地から 1100 名の参加があった。

1 日目は、会場校である若原道昭先生（龍谷大学学長）、運営責任者である松本和一郎先生（龍谷大学）よりの挨拶の後、シンポジウムが開始された。第一部ではシンポジストとして結城章夫先生（山形大学学長）、石川憲一先生（金沢工業大学学長）、田中每実先生（京都大学高等教育研究開発推進センター長）から、各々の大学における取り組みが紹介された。

山形大学の取り組みとしては、教養教育に重点を置く教育改革に取り組んでいること、またこの基本方針を行うためのプランを毎年策定し、PDCA サイクルを確立することにより達成状況の検証を行っていることが紹介された。学士課程教育を実施するためにオーガナイズを専門におこなう専任教員 20 名、専任職員 15 名の体制を作ろうとしている案が示された。また、月に 2 回の学長オフィスアワーが設けられており、学生だけでなく教員、職員とも話し合いをもてるようにしている取り組みを行っているということであった。

金沢工業大学の取り組みとしては、個性ある学士教育の創造のための綿密で一貫した体系およびこれを行うためのきめ細かなサポート例が紹介された。この中でも、キャリア教育実践として自分の特性、高校までの自分史と大学卒業後のキャリア像から在学中の取り組みを明確化する取り組みが印象的であった。

田中先生からは、学生が身につける“べき”力についてその成立根拠が明確でないこと、学士教育で重要視されている”人間力“の意味は大学ごとに違いがあること、および他大学の事例を直輸入してもうまくいかないことがあるので大学ごとにその最適解を見出さなければならぬのではないかという意見があった。

第二部では質疑応答を兼ねて、教育の創造と FD、学生が身につけるべき力、大学間の連携の可能性についての話があった。

1. 教育の質の保証のために教員の教育力の向上が必要でありこのために FD がある。すなわち FD とは同時進行である。
2. 人間力とは一生かけて作り上げるものであり、これを明示してこの土台をつくるのが学士教育である。そのために大学なりのポリシーが必要であり、これがぶれないことが大切ではないだろうか。
3. 大学間の理念の違いをコンソーシアムがどのように共通化するのか、複数の大学での共同開講は可能か、専門の住み分けは必要か、などについての話がなされた。また、授業アンケートの様式の共有についての事例も報告された。

2日目は8つの分科会と4つのミニシンポジウムに分かれての討論が行われた。報告者は「キャリア教育の実践と今後のあり方」に参加した。

第一部では各大学における先駆的事例が報告された。川崎友嗣先生（関西大学）からは、中教審答申を簡潔にまとめた後にキャリア教育の学士課程における位置付け、ゴール、評価についての講演およびキャリア教育の二面性、すなわち職業教育と生き方教育についての指摘がなされた。神奈川大学からは早期からのキャリア教育の必要性について、無目的、無目標、コミュニケーション不足、自信が持てないという学生の質的要因と、企業が学生に求める質が向上したという社会的必要性という背景が説明された。また適性検査を用いたキャリア教育の効果検証を行った結果についても報告がなされた。さらに高校と大学の連携によるキャリア教育実施例についても報告された。武蔵野大学からは、行動心理学と交流分析をもとにして作られた「自己の探求」という授業風景のビデオが上映された後、エンロールマネジメントをもとにしたキャリア開発プロジェクトおよびそれに対する効果検証についての説明がなされた。第二部ではこれらに対する活発な質疑応答が行われた。

本フォーラムに参加して、様々な大学におけるキャリア教育の事例を知ることができ、大変有意義であった。

このフォーラムではキャリア教育への専門科目の取り込みについても述べられたが、この点も踏まえて自分の授業改善に役立てて行く所存であり、このような機会を与えていただいたことに感謝いたします。

地域連携型教育から何が学べるか

経営学部 犬塚正智

大学コンソーシアム京都が主催する第14回FDフォーラム・龍谷大学に参加した。2日間にわたり、「学生が身につけるべき力は何か」というテーマで500名を超える参加者のもと、開催された。

第1日目は午後よりのシンポジウム。結城山形大学学長、石川金沢工業大学学長、田中京都大学高等教育開発センター長がシンポジストして登壇し、木野立命館大学教授がコーディネータを勤められた。独立行政法人となった山形大学の結城プラン2009の特徴について結城学長より説明があり、PDCAサイクルを回して改革の進行をチェックする体制が重要であると主張された。次に、金沢工業大学の人間力を高める教育方法について、人間力を高める能力と手段の適切な運用が重要である点が指摘された。キャリアポートフォリオの立案・運用が学生の人間力向上に大きな意味を持ち、創価大学が導入予定の授業ポートフォリオの観点より比較すると興味深い内容となると思った。この報告は斬新な改革案がバランス良くまとめられており、石川学長自らの報告を聞いて大変嬉しかった。田中京都大学高等教育開発センター長からは、前者の批判的意見としてPDCAは教育改革では適さないという主張であり、それではどのような代替案があるのか期待していたのだが提示されなかった。後半においては、会場からの質問票によりコメントがなされ、問題意識の共有と深化がなされたと思う。

その後、夕刻からの情報交換会は、うちとけた雰囲気の中で今日の討議の内容や自身・本学の課題などを教員・職員と話し合った。シンポの問題意識である改革の推進は、止むことがない教育向上の責務であり、各大学の状況などを肌身で感じる事が出来たことは貴重な経験であった。

第2日目は、第1ミニ・シンポジウム「地域連携型教育から何が学べるか」に参加した。午前と午後のセッション、3つ報告からなるシンポジウムが開催された。第1番目は、京都文教大学森教授より「現場主義と地域連携」というテーマで学生プロジェクトの報告であった。学生が主体となり、障害児ケアの取り組み、農業プロジェクト、街の活性化を通して学生の社会性を育成していることの報告があった。教育の社会的な関わりならびに大学の関係性を考える上で大変に参考になった。次に、金澤教授による報告は「住民から学ぶ・地域から学ぶ」をモットーとして、学生・教職員のフィールドワークの実施場所として仏教大学美山・北野キャンパスの活用をしているというものであった。このキャンパスでは、多くの学生によるプロジェクトが実施されており、地域の活性化と公共の福祉に貢献しているとの報告があった。あまりにも教育の範囲が広く、大学の役割としては大きすぎるのではないかと思われる問題もあった。第3報告は、鯉江長岡大学教授による「まちの駅」による地域活性化の事例が報告された。まちの駅で実施された事業に学生が参加することにより、アクション力、シンキング力、チームワーク力、総合力がアップしたことが

アンケートによって確認されたというものであった。地域と大学の生き残り戦略として大学からのプロジェクト案の実施が今後も必要であるということが確認された。さらに報告者に対して質疑応答がなされ、本学でも採用できそうなプログラムもあるという観点から個別に報告者に実施の詳細を聞くことが出来た。

各学部レベルでFD改善が検討されるようになり、今回のフォーラムで、教育改善の新たな視点を見つけることが出来たと思う。今後の経営学部におけるFD活動を展開する上でも有益な機会となった。最後に、年度末に今回のフォーラムに参加させていただいたことに感謝申し上げたい。

未来を担うプレFDの創造－大学院生大学教員準備研修のあり方と課題

文学部 季武嘉也

第1日目は表記のタイトルによる全体シンポジウム形式で、結城章夫山形大学学長(元文部次官)・石川憲一金沢工業大学学長(20年間ほど学長職)・田中每実京都大学教授(教育学者)がそれぞれ報告し、おわって質問用紙を基にした質疑応答が行われた。それぞれ自画自賛的な話が多かったが、要点は、

1. 大学として卒業生に学士力を保証しなければならないが、学士力とは知識力と人間力によって構成されること
2. 大学全入化時代の入学生に一定の水準を求めることは不可能であり、そのため卒業させる際にも、一定の基準を設定することは事実上無理なこと
3. そのため、各大学としては限定的個性的な目標を設定し、その遂行結果を評価し、また新たな目標を達成するというPDCAを通し、また大学教員のFDと連動させながら新たな創造的学士課程教育を創造していくしかないこと

などであった。個人的感想でいえば、山形大学・金沢工業大学は、本学と同じようにいわゆる中規模校で、非常に積極的、理想的なFD活動を進めているが、両校が試みていることは既に本学でも試みられており、特に新鮮みは無かった。それに対し京都大学の田中教授は、大規模校では学部自治が強くて思うように進まないが、中規模校の試みも画一的であり、今後は大学相互に情報を交換しながら(協調)、同時に個性化(競争)する必要があると述べ、ほぼこれがこのシンポジウムの結論であったように思われる。

シンポジウム終了後、学生食堂で情報交換会が短時間であるが開催され、季武は芦屋女史短期大学のFD委員長と話をしたが、彼に依れば、FD活動は教授会での口頭報告やホームページではなかなか徹底しないが、教授会資料として「FDニュース」を配布し要点を示すことで教員全体に周知できるようになった、という話があった。

2日目(10:00~15:00)は第3分科会「未来を担うプレFDの創造－大学院生大学教員準備研修のあり方と課題」に出席した。この分科会は季武にとって第1希望ではなかったが、主催者側の措置でここに配属されてしまった。大学院生が将来において教員に移行する場合、教育に不安を持つ場合が多いこと、送り出す大学側として大学院生に教育に対する勉強をさせておけば就職先大学が安心して受け入れられること、などの理由から大学院生にこのようなコースを設定する大学が生まれつつあり、且つ文科省も大学院FDとして予算をつけるケースが増えるようなので、このような分科会を設定したとのことであった。ただし、これは自分の所の院生を自分以外の大学に送り出すことを前提にしており、本学には余り関係ないようだが、要するに、1ないし2日間に集中的に教授スキルばかりではなく、大学教員としての仕事の内容、授業実習、体験談、グループ討論、ワークショップなど多彩なプログラムを用意し、コースを終えたディプロマを与える、というものだが、研究で忙しい大学院生の参加をいかに確保するかが最大の課題であるという。ただし、日本では

大学院生プレFDとしてTA制度があるが、これは今後重視されなくなり、このような制度が大学院共通科目となる可能性があること、大学新任教員教育の代替措置ともなること、分野を超えた院生の楽しい交流の場となること(開会式・修了書授与の儀式化、ランチタイム、パーティなどお楽しみが容易され、授業形式も多彩で飽きさせないなど工夫が凝らされている)などメリットもあり、今後進展の可能性もあろう。

キャリア教育の実践と今後の在り方—学士課程教育の構築を求める動きの中で—

法学部 花見常幸

第1日(2月28日)は、今回のFDフォーラム全体のテーマである「学生が身につけるべき力とは何か—個性ある学士課程教育の創造—」をテーマに、シンポジウムが行われた。このシンポジウムでは、まず3人のシンポジストからの報告がなされ、続いてフロアからの質問を受けての質疑応答が行われた。シンポジストである山形大学の結城章夫学長と金沢工業大学の石川憲一学長からは、両大学が取り組んでいるユニークな学士課程教育の実践について報告があった。山形大学の結城学長は、学生が幸せになるための「人間力」の養成こそが教養教育の目的である点を強調し、金沢工業大学の石川学長も「学力(知識・技能)×人間力=総合力」という定式を示して「人間力」教育の重要性を強調していた。両者が教育目標とするところの「人間力」の内容は、もちろん異なるものであったが、学士課程教育の構築に先駆的な形で取り組んでいる両大学とも、「人間力」という点を強調していた点が印象的であった。次に京都大学高等教育研究開発推進センターの田中每実センター長からは、今回のフォーラムのテーマ(主題)の分析に力点を置いた報告がなされた。田中センター長は、「学士力」なる概念は、平成20年12月24日の中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」の中で、あくまで「参考指針」として、つまり「例示」として掲げられたものであり、その意味で、学士号を与えるプロセスとしての学士課程教育の創造は、ローカリティと日常性に即した形で、言い換えれば各大学の個別性を尊重した形で行われるべき旨をとくに強く主張していた。

第2日(3月1日)は、分科会とミニ・シンポジウムが行われ、第3ミニ・シンポジウム「キャリア教育の実践と今後の在り方—学士課程教育の構築を求める動きの中で—」に参加した。ここでも3人のシンポジストからの報告を受けて、フロアとの質疑応答がなされた。最初に、関西大学社会学部のキャリアデザイン担当主事である川崎友嗣教授から、学士課程教育におけるキャリア教育の位置づけを中心として報告があった。キャリア教育には、2つの機能、すなわち、①学生と社会をつなぐ機能をもつ職業教育としてのキャリア教育と、②現在と将来をつなぐ機能をもつ生き方教育としてのキャリア教育があり、学士課程教育の中で後者をどう位置付け、充実したものにしていかが重要であるとの指摘があった。続いて、神奈川大学の就職事務部長の明比卓氏と武蔵野大学キャリア開発部長の伊藤文男氏からそれぞれの大学でのキャリア教育の実践例が報告された。

各大学のユニークな取り組みに大いに学ぶところが多かったが、学士課程教育の構築なし創造という作業は、今回のフォーラムのサブタイトルが示すように、それぞれの大学がその個性を發揮する形で独自のものを構築せねばならないことを強く感じたフォーラムであった。